



CENTER NEWS

OCTOBER 2013

www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp



左上：ブダペスト風景 左下～中：センメルweis医科大学～卒業式 右下：日本人卒業生らと 右上：ペスト撲滅記念碑（P.3に詳細）

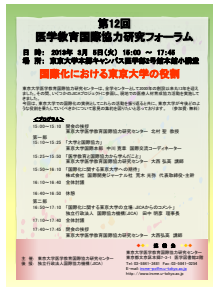
Contents

- 第12回医学教育国際協力研究フォーラム開催報告 2
講師 大西 弘高
- フリークォーター報告 5
講師 孫 大輔
- ハンガリー国立大学医学部視察報告 3
教授 北村 聖
- 臨床診断学実習 5
講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝
- 第45回日本医学教育学会大会出席報告 3
講師 大西 弘高・特任研究員 飯岡 緒美・大学院博士課程 春田 淳志
- 東京大学医学教育セミナー 6
講師 大西 弘高
- アジア太平洋医学雑誌編集者会議 4
教授 北村 聖
- 医学教育基礎コース 6
講師 孫 大輔
- 欧州医学教育学会（AMEE）2013出席報告 4
講師 孫 大輔
- 模擬患者つつじの会 7
講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝
- 臨床推論勉強会 5
講師 孫 大輔
- ジョイス・ピカリング先生 まもなく来日 7
マギル大学医学部准教授 Joyce Pickering
- プライマリ・ケア研究会 5
講師 孫 大輔
- センター日誌／編集後記 8

第12回医学教育国際協力研究フォーラム開催報告

講師 大西 弘高

東京大学医学教育国際協力研究センターは、全学センターとして2000年の創設以来丸13年を迎えた。開発途上国への医学教育の国際協力は当センターの使命の一つだが、全学センターとしての活動は2013年3月末にて区切りを迎えることとなった。年1回実施してきた医学教育国際協力研究フォーラムは、東京大学全体での取り組みを踏まえて活動を振り返る機会という位置づけで開催することとなった。概要は以下の通り。



▲ 第12回フォーラムポスター

日時：平成25年3月5日（火）午後3時～5時45分
会場：本郷キャンパス医学部2号館（本館）小講堂
主催：東京大学医学教育国際協力研究センター
後援：独立行政法人国際協力機構（JICA）
テーマ：国際化における東京大学の役割

主な発言内容：

1. 開会の挨拶 医学教育国際協力研究センター 北村聖 教授

- 文部科学省は日本の大学において、グローバル化のトップ30を選んで資金提供している。東京大学では、2015年に向けての行動計画アクション・プランを掲げ、グローバルキャンパス形成という国際化関連の計画も盛り込んでいる。この流れに合わせ、留学生や外国人研究者を受け入れると共に、学生、大学院生、研究者をより外へ出るようにし、アジアとの連携なども謳っている。
- われわれが一番重視してきたのは、教員本人が出て行って国際協力をする、技術協力によることである。欧米のいわゆる一流大学からは、若手やベテランが現地に行き働いているのを目にしてきたが、日本の大学人が現地で活動している姿はなかなか見られない。一流大学の教員は、国際協力で途上国に出向くべき。

2. 講演「大学と国際協力」東京大学国際本部 中川寛章 国際交流コーディネーター

- 我が国の大学は、50年以上にわたり開発援助の主要な担い手として教育研究分野での人材育成に取り組んできた。途上国の高等教育機関の設立や基礎教育の改善、地球的課題への対応等、大学が果たした役割は大きい。一方、近年、我が国における行財政改革や新興国の台頭等社会環境が大きく変化するなかで、新たな国際協力の仕組みと工夫が求められている。我が国を取り巻く状況の変化は、同様に、大学の在り方にも大きな影響を与えており、なかでも国際社会で活躍できる若者の育成は喫緊の課題と認識されている。
- 東京大学は、「行動シナリオ」に基づき国際化に向けたグローバルキャンパスの形成に取り組んでいる。大学が推進する知の国際化とグローバル人材の育成という点において、国際協力への参加は有効な手段である。大学の本務である教育・研究活動への国際協力の活用、応用を一層推進すべきであろう。

3. 講演「医学教育と国際協力から学んだこと」医学教育国際協力研究センター 大西弘高 講師

- 当センターはアジア域内での国際協力プロジェクトに参画してきた。国内への医学教育領域での推進、JICA等を通じた国際協力事業に積極

的に参画してきた。

- アフガニスタン、インドネシア、ラオス、モンゴルで国際協力を経験してきた。社会基盤の成熟度の低い国々では、保健省アドバイザーなどと組み合わせなければ、システムの改革が困難。一定レベルの成熟度の国々では、大学間で継続的關係につなげると自立発展性を高められる可能性あり。
- 海外からの留学生は2009年で13万人と増加。日本からの海外留学は2004年をピークに減少。
- 英国 Times 誌の大学ランキングでは、東京大学は研究や教育面では欧米と互角。一方、外国人教員比率、留学生比率は世界で100位以下。国際協力活動は学内でバラバラに行われているが、まとまった力になっていない。国際と名の付く活動を全学的にまとめていくことが重要か。

4. 講演「国際化に関する東京大学への期待」（株）国際開発ジャーナル 荒木光弥 主幹

- 先進国の所得シェアは80→50%へと低下し、中進国、新興国の台頭が進行。首脳会議もG7からG20へと拡大してきた。
- 国際機関や先進国政府主導の援助体制を批判し、民間ビジネスを重視する論調も現れている。英米では、大学側が民間企業などと連携し、PPP（public private partnership）などの枠組みで協力する流れ。大学側も戦略的に仕掛けるべき。

5. 講演「国際化に関する東京大学の立場：JICAからのコメント」独立行政法人国際協力機構（JICA）田中明彦 理事長

- 援助は相手国に役に立つことが本質。各途上国における現状とニーズに即した解決方法を考えていくことが大事。これは大学が行う知的貢献そのもの。技術協力は、途上国現場で専門家が経験を積む学習の場でもある。
- 今後、対象国としてアフリカ諸国、インドなども視野に入れるべき。

6. 全体討議

- 国際協力の取り組みから学んだ成果は、各組織あるいは全国的に蓄積し、発信していくような仕組みが必要。
- 様々なプロジェクトに大学関係者が参加した場合、プロジェクト終了後も関係を継続できるようなシステムによって効果を大きくできるポテンシャルがある。
- 大学人が国際協力に取り組むインセンティブはない。大学としても行動シナリオに「国際協力」の文字がないのが問題。

総括：

現地に旗を立てるという意味での国際協力の重要性が再認識されると共に、その成果として生まれた拠点アカデミックな観点で将来に繋げていくことが重要だという意見で一致した。国際協力による顔の見える関係づくりを推し進めることで、学生や研究者の交流、共同研究の立ち上げなどが活発化するという事例が共有できた。

当センターが行ってきた国際協力プロジェクトでの取り組みは、本学においてかなり特異なものである。当センターで得た経験、知見を、大学全体の将来に繋げられるような工夫についても考えていくべきであろう。



▲ フォーラム講演者

ハンガリー国立大学医学部視察報告（6月25日－7月3日）

教授 北村 聖

日本の高校を卒業して、ハンガリーの医科大学に入学しEUの医師免許取得を目指すプログラムがある。その検証というわけではないが、どのような大学でどのような教育がされているのか、学生諸君のモチベーションは如何などを知りたくて、機会を得てハンガリー国の医科大学を視察した。ハンガリーには国立の医学部が4校ある：セメルweis大学（Semmelweis University）、ペーチ大学（University of Pecs）、国立セグド大学（University of Szeged）、デブレツェン大学（University of Debrecen）。

セメルweis大学は首都ブダペストにあり、産褥熱の予防で有名な産科医セメルweisの名を冠している。日本からの留学生の第1期生が8名卒業するとのことで、山本在ハンガリー日本大使とともに卒業式に参列した。そののち、大学を見学し、また学生達と面談した。大学はハンガリー語、ドイツ語、英語による3コースがあり、ハンガリー語の自国学生は無料であり、ドイツ人と、英語の国際コースは有料である。ドイツ語コースはほとんどがドイツ人であり、英語コースは、北欧、イスラエル、英国、米国などが多く、アジアからも韓国、中国からの留学生もいるとのことであった。日本人にとっては、医学の内容もさることながら、全て英語で学び考えることが大変であったとのことである。彼らは、大学を卒業することによりEUでの医師資格を取得した。多くのものは、日本での医師資格を目指したいと言っていた。

ルーマニアとの国境に近いデブレツェン大学は、伝統ある大学で、かつてのドイツ式医学教育を彷彿とさせる建築物の配置であった。内科棟、外科棟、婦人科棟などが独立して立っていてそれが地下通路でつながっていた。かつて東大をはじめとした日本の大学の構造が今もそこにあった。ここにも、自国語コースに加え、英語コースがあり、日本からの留学生が寮生活をしながら学んでいた。ここでは、韓国が多くの留学生を派遣しており独自の学寮を持っていた。学生との面談から、医学教育はもちろん国際認証を受けており、レベルも国際的であるとのことであった。自分が見学した範囲では、臨床実習は学生が多い分日本に比べてやや粗雑な感じを受けた。基礎医学や臨床医学の座学のレベルは相当なものがあるように見受けられた。



▲ デブレツェン大学内科救急外来棟

第45回日本医学教育学会大会出席報告

講師 大西 弘高・特任研究員 飯岡 緒美・大学院博士課程 春田 淳志

標記学会は、7月26～27日に千葉大学が主幹校となり、千葉大学亥鼻キャンパスにて開催された。「Quality Assurance of Medical Education～学習成果基盤型教育の導入と展開～」をテーマとし、いわゆるアウトカム基盤型教育に関連した内容が中心となった。5つのシンポジウム（以下シンポ）、11個のパネルディスカッション（以下パネル）、多数の口演やポスター発表など、熱い2日間となった。当センター教員では、北村教授が「シンポI：コンピテンシーを基盤とする学部教育、臨床研修、生涯教育の構築」、「シンポIII：卒前・卒後教育のアウトカムとしてのプロフェッショナリズム」、「パネルV：分野別認証評価の導入と実施」に、大西が「パネルVII：カリキュラムとは何か」、「パネルIX：ネットワークを活用した医療者教育の情報基盤のあり方」に出た。また、孫講師が「演劇の手法を用いた多職種間連携教育の試み」に関してポスター発表を行った。ほかに、模擬患者つつじの会に関するポスター発表も行われた（p.7参照）。（大西）

『「疑義照会」に関する医学教育と薬学教育における現状』と題して発表した。これまでの調査で疑義照会に関する知識や意識に関して、医師・薬剤師間で大きな差が見られ、これは教育に由るものではと考え調査をした。疑義照会に関するコアカリの比較では、医学教育では記載はなかったが、薬学教育では項目が設けられシミュレートなど実践的な学習も含まれていた。疑義照会は外来における医師と薬剤師の情報共有や医療安全確保の点で重要であり、医学と

薬学との教育のギャップを埋めていくことで現場でのギャップを埋められるのではと考察した。質疑応答では、勤務医から法的根拠の存在を知らなかった、薬剤師側からの積極的な働きかけも必要という意見を頂いた。今後、薬剤師から疑義照会に関する啓蒙を行うことで、医師との連携強化を図っていくことが重要と感じた。（飯岡）

私は2日目に行われた「専門職連携教育 Interprofessional education (IPE) のアウトカム・方略・評価」のシンポジストの一人としてIPEの定義づけ・意味づけ、歴史、理論的な枠組みについて話した。特にチーム医療と混同されやすいIPEの言葉の意味づけを強調し、インタラクションやプロセスを重視する言葉だということに参加者と共有し、多くのご意見をいただいた。また他のシンポジストの大学内でのIPEの取り組みの発表から、学生を一堂に集める工夫やカリキュラム統合のことが知り、非常に勉強になった。本邦で先進的にIPEに取り組む大学の現状と今後の課題を知り、改めて理論やEvidenceと照らし合わせ、吟味するサイクルの必要性を実感するシンポジウムであった。（春田）



▲ ポスター発表（孫・飯岡・澤山）

アジア太平洋医学雑誌編集者会議

教授 北村 聖

アジア太平洋医学雑誌編集者会議 (Asia-Pacific Association of Medical Editors; APAME) と WHO 西太平洋地域医学論文索引 (West-Pacific Region Index Medicus; WPRIM) ならびに日本医学雑誌編集者会議 (Japanese Association of Medical Journal Editors; JAMJE) の合同会議を 8 月 2 日から 4 日まで東京の日本医師会館で開催した。

東アジア 26 か国から 280 人 (うち外国人 120 人程度) が集い、この地域の医学雑誌の質の向上、ひいては医学研究、医学教育の向上を目指して意見を交換した。もともとは、WHO 西太平洋事務所が、米国の Index Medicus に採用されない地域の雑誌情報を集積したいとのことで WPRIM を立ち上げ、それが発展して APAME ができた。APAME は毎年開催され、昨年ではマレーシアで開催された。その際、今年度の開催は東京で、また 2 年間会長を仰せつかった。

会議では、オンライン出版、Creative Commons License、臨床試験登録などが話題になった。おりしも、製薬メーカーも関与した不正論文が日本で社会問題になっており、論文ねつ造と不正論文のセッションでは多くの人の関心を集めていた。JAMJE は日本医学会の分科会の編集者がメンバーであり、多くのメンバーが参加し意見を交換した。そのほか、査読者の交換や、編集者のためのガイドラインなども話題になった。また、特別講演では、

吉岡東京女子医科大学理事長から「医学教育と出版」と題して貴重な講演をいただいた。

また、ポスター、講演ともに各国における医学雑誌の出版状況が発表された。東京大学医学教育国際研究センターは特にラオスにおいて唯一の医学雑誌である Lao Medical Journal の出版を経済面から支援していることもあり、途上国の医学情報交換に貢献できるものと考えている。

1 日目の夜、主に海外からの参加者を浅草へ案内し交流を深めた。実際、主催してみても、ムスリムの人々の食事やラマダン、祈祷室などの対応を心配したがほとんど混乱はなく、スムーズな運営、良質なアメニティを提供できたと自負している。

来年はモンゴルのウランバートルで開催される。



▲ 集合写真

欧州医学教育学会 (AMEE) 2013 出席報告

講師 孫 大輔

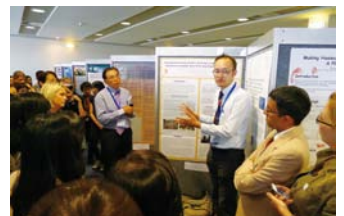
2013 年の AMEE (欧州医学教育学会) はチェコ共和国の首都プラハで 8 月 24 ~ 28 日に開催され、世界 100 以上から医学教育に携わる実践者や研究者 3000 人以上が参加した。ウルタヴァ川 (モルダウ川) に抱かれるプラハは、神聖ローマ帝国の首都であった当時の中世の街並みを残す、奇跡のように美しい街であった。

日本からも 40 人以上の医学教育者が参加し、多くの興味深い発表が行われた。京都大学の錦織宏氏は「武士道から見た日本の利他主義と医療プロフェッショナリズム」と題した口演発表を、羽織袴姿で行い好評を博した。岐阜大学の西城卓也氏は「小グループ学習におけるアジア人のパフォーマンスに影響する因子—アジア人はローマ人のようにふるまうべきか?」という口演発表で、儒教文化による集団主義の影響について考察した。この発表に対しては活発な議論が交わされ、構造的にヒエラルキー (敬語など) が組み込まれている日本語の特性や、西洋化したアジア人におけるパフォーマンスなどについて、アジア各国、ポーランドなどの東欧、北米など様々な地域の人々が議論する様子は大変刺激的であった。

2012 年度の IRCME の客員教授であったジェフリー・ウォン氏が、東大で行った「臨床ケースカンファレンスにおける後期研修医の教授能力改善の試み」について口演発表を行った。内容は、症例をプレゼンする研修医に対して、事前にウォン教授がメンタリ

ングを行うことによって、教材のプレゼンテーション技術や学習ポイントの表現の自己評価が有意に向上したというものである。また筆者も、被災地支援に関するテーマで「東日本大震災地域におけるプライマリケア医研修プログラムの開発と評価」というポスター発表を行った。30 名ほどの聴衆のうち数名の方から「外科医なども研修したのか?」「どのように遠隔地への指導体制を組んだのか?」などの質問を受け、関心が高いようであった。800 を超える世界中から集まったポスターは様々な工夫が凝らされており、漫画やカラフルなイラスト、立体模型が挿入されたものなど、見るだけで大変楽しいものばかりであった。

8 月 26 日の夜には日本人参加者による懇親会「Japan Night」に 30 名以上が参加し、大変盛り上がり楽しいひと時を過ごした。2004 年には AMEE の日本人参加者がわずか 7 名だったという。今では海外の医学教育学の修士課程を終えた日本人が 10 名にのぼり、国際舞台で活躍する若手の研究者も増えている。今後も国際学会に多くの医学教育者が参加し、本邦の医学教育がさらに発展することを切に願っている。



▲ AMEE2013 ポスター発表

臨床推論勉強会

講師 孫 大輔

医学生を対象とした臨床推論勉強会は診断学実習がはじまる4年生を主な対象として、臨床推論の基礎から学び、各症候について診断学を中心にじっくりと学べる内容となっている。

2013年は早くも1月より3年(新4年)学生の希望者を対象として、月1～2回ペースで平日の朝7:30～9:00で開催した。7月までの7ヶ月間で計12回開催し、毎回10～15名程度の学生が参加した。

内容としては、参考書としてローレンス・ティアニーの「聞く技術—答えは患者の中にある」(日経BP社)を用い、1回につき1つの症候を取り上げた。前半は学生自身に症候に関する知識をまとめたものをプレゼンさせ、私が適宜解説をした。後半は実際のケースにそって、最初は学生と私で模擬面接を行い、その後情報収集から実際にどのように診断にいたるかというプロセスについて解説した。7ヶ月間で取り上げた症候は「呼吸困難」「記憶力障害」「浮腫」「発疹」「咽頭痛」「頭痛」「めまい」「失神」「胸痛」「腰痛」などである。

2013年はOSCEが行われる12月まで継続する予定である。2014年からは3年生を対象にまた新たなシリーズを開始したいと考えている。



▲ 臨床推論勉強会の様子

プライマリ・ケア研究会

講師 孫 大輔

医学生を主な対象として、大学のカリキュラムでは学ぶ機会が少ないプライマリ・ケアや総合診療、家庭医療について継続的に学びを深めて行く勉強会を2013年より新たに開始している。

回	日時	タイトル	講師	参加数
第1回	2013.1.30	プライマリ・ケアの何が重要なのか?	ジェフリー・ウォン (サウスカロライナ医科大学)	19名
第2回	2013.2.27	世界の家庭医療 (family medicine) について学ぼう	ダニエル・サルチェード (日本大学医学部)	27名
第3回	2013.3.27	総合診療医のキャリア開発とキャリア選択	ジェフリー・ウォン (サウスカロライナ医科大学)	13名
第4回	2013.4.23	国境を越えた医師からのメッセージ～君も“越境”してみないか?～	中川崇 (国境なき医師団)	46名
第5回	2013.5.22	英国総合診療医に聞く: 英国のプライマリ・ケア	澤憲明 (英国総合診療医)	23名
第6回	2013.6.24	世界のプライマリヘルスケアと医療政策	森雄一郎・上野諒 (東京大学医学部)	13名
第7回	2013.7.24	日本の家庭医療とプライマリ・ケア	藤沼康樹 (生協浮間診療所)	17名

米国総合内科医のウォン教授やカナダの家庭医サルチェード先生、英国GP (general practitioner) の澤先生には、海外のプライマリ・ケアや family medicine について話をさせていただき、本邦の家庭医である藤沼医師には、今後の日本におけるプライマリ・ケアの行方について話を伺うことができた。今後も定期開催の予定である。

フリークォーター報告

講師 孫 大輔

2013年1月には3年生の升本浩紀さん、2013年1～2月には5年生の佐々木那津さんが当センターにフリークォーターで配属となった。

升本さんは、プライマリケア医や開業医のキャリア選択に興味があるとのことで、3人の総合診療医や在宅医のクリニックを見学実習し、キャリアパスについて各医師にインタビューを実施し報告した。彼のまとめでは、プライマリケアの現場に対する学生時代からの早期曝露と、多くの診療科で研修をすることに加え、幅広い視点を養うキャリアの重要性が考察されていた。

佐々木さんは、東南アジア、英国、青森県という様々な場所での医療を経験し、今後のキャリアや医学教育への提言に役立るというものであった。シンガポールやタイではGPなどプライマリケア医の医療を主に見学し、英国ではオックスフォード大学のプライマリケア・ヘルス・サイエンス科で臨床研究実習コースに参加。青森県では市中病院で僻地医療の実際を学んだ。彼女からは、日本の医学教育ではコモディティの経験が少なく、医学生から研修医へのギャップが大きいことが指摘された。

いずれの学生も真摯に実習に取り組む、素晴らしい報告を行ってくれたことをここに感謝したい。



▲ 発表を終えた佐々木さんに修了証を渡す北村教授

臨床診断学実習

講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝

当センターは臨床診断学実習に直接・間接に協力している。同実習開始前には総合研修センターの江頭正人特任准教授と実施する「担任に対するFD (Faculty Development)」がある。16班の担任の先生(臨床系の講師の先生方)が直接担当される各実習(「カルテの書き方」「医療面接実習」「HDPE」「NEJMを用いた診断推論」)の説明を行う。当センターはこれらの実習の教材を開発・提供している。学生に対しては、全員に「医療面接実習総論」を行っている。また今年度は2年ぶりに「技能実習」を直接担当する。以下に「医療面接実習総論」の様子を紹介する。学生はまず、模擬患者3人と教員による3つのパターンの医療面接のデモンストレーションを患者の視点に立って観察し、良かった点や改善点を隣の人とディスカッションする。次に学生同士で医療面接を実際に体験する。医師役、患者役を実際にやってみることで立場が分かったり、デモのようにはいかない難しさを実感できたり、医学知識の必要性を感じたとの意見が寄せられた。最後に医療面接についてのミニ講義でまとめ、翌週からの実習に備える。学生はほぼ全員が出席し、積極的に授業に取り組んでいる印象があった。



▲ 学生同士の医療面接

東京大学医学教育セミナー

講師 大西 弘高

ほぼ月例で開催している医学教育セミナーは、2013年7月で56回を数えるに至っている。2013年3～7月は、South Carolina 医科大学から来られていた Jeffrey G. Wong 先生、早稲田大学の西條剛央先生に加え、センター教員3名が1回ずつ担当する形となった。セミナー参加者数は30～70名程度と常に一定以上の方々にお集まりいただき、嬉しい限りである。

第52回のWong先生の講演は、外国人特任教授としての在任期間の締め括りとなった。2000年の当センター発足時に東大

医学部に招かれた Inui 教授と当時の医学部教員のプロジェクトによる卒前教育カリキュラム改革への提言を振り返り、その後の変化を検証したもので、当センターの医学部移管前の節目にふさわしいものであった。



▲ 第56回セミナー 西條先生

第53回の孫講師の講演は、カフェというニュートラルかつフラットな関係の持てる場において、市民や患者と医療多職種が健康や医療についてそれぞれの視点から対話する試みについてであった。第54回の北村教授の講演は、日本でも国際認証評価が具体化されつつある今、認証評価基準案、東京女子医大で行われた国際外部評価などが盛り込まれた内容であった。第55回の大西の講演は、ポートフォリオ評価を具体的に意味のあるものにしていくプロセスについて家庭医療専門医育成プログラムの例を中心に話をした。第56回の西條先生は、被災地への支援の経験から、互いの垣根を取り払ってプロジェクトを進める上で構造主義の考え方が役立つという点について、「愛とは何か」といった例なども交えてお話しいただいた。

医学教育セミナー（平成25年3月～平成25年8月）

開催日	テーマ・講師
第52回 2013.3.28	東京大学の卒前医学教育に対する評価：イヌイ報告からの振り返り ジェフリー・ウォン 医学教育国際協力研究センター特任教授
第53回 2013.4.26	“カフェ型”ヘルスコミュニケーションにおける学びとは？～越境・対話・変容～ 孫 大輔 医学教育国際研究センター 講師
第54回 2012.5.28	医学部の教育を認証する 北村 聖 医学教育国際研究センター 教授
第55回 2013.6.18	ポートフォリオ評価 大西 弘高 医学教育国際研究センター 講師
第56回 2013.7.9	「ふんばろう東日本支援プロジェクト」にみる現場主義と人材育成の原理～本質学としての構造主義の視座～ 西條 剛央 早稲田大学大学院商学研究科 専任講師 ふんばろう東日本支援プロジェクト代表

医学教育基礎コース

講師 孫 大輔

2011年度から始まった医学教育基礎コースは、本学医学部の Faculty Development（教員能力開発）の一環として、医学部教員（特に中堅～若手教員・新任教員）を対象に、実践的な教育法について学べるコースを実施している。今年度も計10回のセッションを予定し、すでに3回を終えた。講義はグループ・ディスカッションやロールプレイなど参加型の形式もおりませ、楽しく学べるようになっている。

一部内容を紹介します。第2回「学習者との対話から見えるもの～ニーズ評価と目標設定を中心に～」(春田医師)では、前半はニーズ評価の基本を共有するため、課題を同定する4つの基

本領域 (Schwab's four common places) に視点を向け、ニーズ評価の種類について紹介し、後半はコーチングのGROWモデルを使い、ロールプレイを実施しながら学んだ。第3回の「魅力あるレクチャーの方法」(北村教授)では、「眠くならないミニレクチャー」と称して、忙しい臨床の合間に、学生・研修医が疑問を生じたタイミングを逃さずに、ポイントを明確にしたレクチャー法について解説。ポイントとして、全体像とゴールを示すこと、適切な内容とボリュームとすること、インタラクティブに進めること、話し方の工夫（適切なスピードとアクセント）を示し、参加者同士でロールプレイを行ってもらった。

毎回10～20名前後の参加があり、学内のみならず学外の教員、指導医が参加し好評を得ている。また附属病院の指導医の参加が少ない傾向にあり、より多くの方の参加を望んでいる。

学内の方の参加費は無料(学外の方は1000円)、医学図書館3階研修室にて、毎回18:00～19:30の予定。問合せは sond-tky@umin.net (担当:孫) まで。



▲ 第3回「魅力あるレクチャーの方法」を講義する北村教授

	日時	テーマ	講師
第1回	5.14 (火)	よい教員の資質：教育理論との関連	大西
第2回	6.28 (金)	学習者との対話から見えるもの～ニーズ評価と目標設定を中心に～	春田
第3回	7.30 (火)	魅力あるレクチャーの方法	北村
第4回	9.17 (火)	フィードバックとリフレクション	孫
第5回	10.15 (火)	臨床能力の評価	大西
第6回	11.18 (月)	MCQ形式の問題の作成の仕方～国家試験方式の良問を作りましょう～	北村
第7回	12.17 (火)	インストラクショナル・デザイン	孫
第8回	1.14 (火)	臨床推論の教育	大西
第9回	2.17 (月)	プロフェッショナリズムの教育	北村
第10回	3.18 (火)	コミュニケーションをいかに教えるか	孫

模擬患者つつじの会

講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝

「模擬患者つつじの会」が発足してから今秋で早くも6年目を迎える。現在は、ほぼ隔月で定期勉強会を開いてスキルアップを図っている。3月には、4月から初めて実際の医療面接実習に参加する4期生への直前実践力強化の目的と、先輩模擬患者さんからの要望も多かったことから6人の学生さんに参加してもらい医療面接を行った。実際、2013年度前半で4期生の全員が医療面接実習に参加し順調なスタートを切ることができた。さらに、2012年度のまとめとして北村聖教授による「医学教育におけるプロフェッショナリズム」と題した特別講演を行った。

続いて、年度初めの4月16日には奈良信雄先生（東京医科歯科大学）に「アメリカ医師国家試験における標準模擬患者（SPs）の役割」と題した特別講義をして頂いた。

今期は、養成者の自作自演によるフィードバックのためのビデオ教材、模擬患者自身のアドリブでは難しい医師役用シナリオなどの教材の新規開発を行った。OSCEについては既に何回か講義を行っているが、今回は医師役用のシナリオも数パターン用意して、グループで演習を行い、会員同士で標準模擬患者としての評価を行った。

7月16日には、本会の設立当初の東京医科歯科大学の代表者であられた山脇正永先生（京都市立医科大学）を外部講師として招くことができ、本会の歴史を含め「模擬患者と医学教育」

と題して特別講義を行ってもらった。その後、短い時間ではあったが模擬患者さんが中心となり茶話会を開き懐かしく楽しいひとときを過ごすことができた。

また、日本医学教育学会大会では、本会について過去2回、一般口演、ポスター発表を行っているが3年ぶりに澤山がポスター発表を行った。前号で報告した診断学の講義に関する事で、「模擬患者に対する「診断学」講義はパフォーマンスにどのような影響を与えるか?」という題で発表を行った。全国の養成者の先生方からいろいろ貴重なご意見を頂くことができ大変有意義であった。本研究も様子を見ながら進めていきたいと考えている。

後半もさらに、模擬患者の質の向上をめざして会を運営していく予定である。



▲ 医学教育学会でのポスター発表

ジョイス・ピカリング先生 まもなく来日

マギル大学医学部准教授 Joyce Pickering, MD, FRCPC, FACP

10月16日から半年間、特任准教授としてお迎えするジョイス・ピカリング先生の自己紹介文です。

I am very honoured to have been chosen for the 2013-2014 Kimitaka Kaga Visiting Professorship in Medical Education. I am trained clinically as a general internist, and have been involved in medical education at both the undergraduate and graduate levels at McGill University Faculty of Medicine, in Montreal, Canada. From 2004 to 2011 I was the Associate Dean for Undergraduate Medical Education. During this time, two of my important responsibilities were ensuring accreditation standards for our program, and leading a strategic planning initiative to design a new MD curriculum, which is launching in September of 2013. I am very interested in medical curricula, and international standards for medical education. As a result of my time at Todai I hope to be able to understand and compare the Japanese system with the North American one. A further interest of mine is bedside clinical teaching – something I do regularly with both medical students and residents, and I would like to observe and participate in this. I speak basic Japanese, and I hope to improve my knowledge and ability in Japanese and the Japanese culture. どうぞよろしくお願ひします！



▲ Dr. Pickering 近影

外国人特任教員の招聘には米国財団法人野口医学研究所に多大なご支援をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

すずかけの苗をお分けします

東京大学医学図書館脇に大きなすずかけの木が立っています。秋冬になると、大人の手より二回りほど大きい葉を落とし、鈴の形をした実をつけます。医学の父、ヒポクラテスのいたギリシャ・コス島の原木から分枝されたもので、ヒポクラテスの木とも呼ばれています。最近、ある新設病院にこどもの苗を一鉢贈呈しました。まだ余分に苗がありますので、ご希望の方はご一報ください。連絡先：03-5841-3583まで。



▲ すずかけの苗



▲ 新しい看板を設置しました (2013.4)

センター日誌 | 2013年3月~8月 |

3 MAR		6 JUN	
5日	第12回医学教育国際協力研究フォーラム「国際化における東京大学の役割」	22日(-10月2日)	臨床診断学実習(模擬患者による医療面接実習)実施
5日	Dr. Wong 指導スタンフォード式FD(グループ2・セッション4)	22日(-10月2日)	臨床診断学実習(HDPE身体診察診断学習)実施
11日	スタンフォード式FD(グループ2・セッション5)	22日	第5回プライマリ・ケア研究会「英国総合診療医に聞く:英国のプライマリ・ケア」
12日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会	28日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会・シナリオアレンジメント
12日	Dr. Wong クリニカルケースカンファレンス第9回	28日	第54回東京大学医学教育セミナー「医学部の教育を認証する」
12日	平成24年度第9回医学教育基礎コース「コミュニケーションをいかに教えるか」	7 JUL	
15日	フリークォーター研究発表会	9日	第56回東京大学医学教育セミナー「ふんばろう東日本支援プロジェクト」にみる現場主義と人材育成の原理~本質学としての構造構成主義の視座~」
19日	スタンフォード式FD(グループ2・セッション6)	11日	平成25年度第1回運営委員会
22日	平成24年度第3回運営委員会	16日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会
25日	スタンフォード式FD(グループ2・セッション7)	24日	第7回プライマリ・ケア研究会「日本の家庭医療とプライマリ・ケア」
27日	第3回プライマリ・ケア研究会「総合診療医のキャリア開発とキャリア選択」	26日~27日	第45回日本医学教育学会大会出席(北村・大西・孫・飯岡・澤山・春田)
28日	第52回東京大学医学教育セミナー「東京大学の卒前医学教育に対する評価:イヌイ報告からの振り返り」	30日	第3回医学教育基礎コース「魅力あるレクチャーの方法」
4 APR		8 AUG	
1日	東京大学大学院医学系研究科附属医学教育国際研究センターに改組	2-4日	アジア太平洋医学雑誌編集者会議2013 Tokyo 主催(北村)
10日	臨床診断学実習(担任に対するFD)	16-19日	中国福建省看護部国際フォーラム出席・福建省立病院視察(北村)
16日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会	24-28日	欧州医学教育学会大会出席(孫)
23日	第4回プライマリ・ケア研究会「国境を越えた医師からのメッセージ~君も“越境”してみないか?~」		
26日	第53回東京大学医学教育セミナー「“カフェ型”ヘルスコミュニケーションにおける学びとは?~越境・対話・変容~」		
5 MAY			
8日	臨床診断学実習(カルテの書き方)		
14日	平成25年度第1回医学教育基礎コース「よい教員の資質:教育理論との関連」		
15日	臨床診断学実習(医療面接実習総論) ↗		

編集後記

お蔭様でセンターニュース No.24 の発行に至りました。IRCME は今年度、医学部の組織に入り、名称も変わりました。看板を新しく掛けかえたり、パンフレットや名刺を新調したりなど、大小の変化がありました。そうした作業には、IRCME 発足当時の資料が参考になり、記録を残し伝えることの大切さがわかりました。名称は変わっても、医学教育セミナーなどの企画は継続し、海外での活動も積極的に進め、外国から先生をお迎えするのはこれまでと変わりません。読者の皆様にもこれからも私共の活動を広くお伝えできればと願っています。(み)

発行元

発行 2013年10月4日
 発行人 山本 一彦
 発行所 東京大学大学院医学系研究科附属
 医学教育国際研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 医学部総合中央館2F
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 株式会社トライ